

## 廃名の研究

廃名（1901－1967）は、現代の中国の文壇において、特異な名声を持っている作家であり学者であります。彼の小説は、実験性に富み、前衛的な味わいを多くもっています。それは修士論文として翻訳した『莫須有先生伝』を読めば明らかです。

実験性に富み、前衛的な味わいを多く持っているとはいえ、彼の小説は、古い農村文化に対して冷静に観察するような態度をとっており、ただしその苦しみを描写するのではなく、悲しい傷を出来るだけぼかし、田舎おじいちゃんおばあちゃんの生活から自然状態の人世美を描こうとするのであります。したがって、廃名的小説は、時代とともに発展していくものではなく、いかなる文芸の潮流にも乗らない不思議な作品となっています。

廃名による小説の創作は、1922年から1948年まで、26年間続きました。その執筆は三つの段階に分けて考えられます。

第一段階は『竹林のストーリー』に代表されます。そのほかに『桃園』『棗』などの作品も含まれます。

第二段階は『橋』に代表されます。芸術において自分の表現テクニックをさらに発展できた段階だと思われます。

第三段階の代表は『莫須有先生伝』であります。

廃名的小説の大きな特徴は、彼が仏教、とりわけ禅の精神と深く結びついていたということにあります。

中国現代作家の中に、宗教との関係をもつ人は多くないと思います。しかも、宗教と緊密に向き合った作家と言え、李叔同（弘一法師）以外には、恐らく廃名だけだと想われます。

廃名の禅宗意識の形成は、胡適、周作人から得た啓発、及び自分の脆弱、敏感な気質、それに沈鬱寡黙な性格と関係があるだと想われます。廃名的小説は、農民の生活の貧しさと苦しさを表すために書かれた物ではなく、その貧しい生活からある悲しさを越える濟度・英知・達観・自然に親しみ、人生を楽しむような生活態度を追求するという特徴があります。それでいて廃名的小説のレトリックは、たいへん直観的・暗示的・神秘的であります。それは恐らく禅の悟りに似た思惟方式の反映だと想われます。

廃名的小説は、内部と外部との二つ事柄を叙述する部分があります。

外部の事柄を叙述する部分の仕組みは、基本的に伝統的な物語のモデルを踏襲しています。例えば、事件が前後して起こり、そこに物語が因果的に連続し、時間が推移していきます。この特徴は、特に『竹林のストーリー』のような初期の作品において明らかであります。これらの小説のストーリーそのものは、事柄を叙述することが目的であるので、伝

統的な事柄を叙述する内在の調和が相変わらず取られています。

それが次第に、内部と外部との二つ事柄を叙述する部分が同じような重要性を表しはじめ、両者に優劣がないような組み立てを形成した小説がかかれるようになります。ストーリーそのものの以外に、叙述の手段事態がだんだん叙述の目的になります。

そういう内面への移行は、『莫須有先生伝』において、もっとも極端かな形で出現しています。『莫須有先生伝』において、外在する叙述の仕組みは、ただ見せ掛け、口実であるとともに、むしろ障害になっています。そこではストーリーは、もう叙述の主な目的ではなく、たんなる背景の地位にまでに下げられています。

廃名が小説に内在する仕組みにおいて表現したいのは、一つ一つの想いを満たす風景の一部分、記憶の瞬間と人世の感遇であります。廃名の小説に描かれる「一瞬」は、まさに「人生の全て」であります。そういう叙述の形式は、まさに仏教にいう「一即一切・一切一即」であります。表面的に叙述されている時間は、ほとんどじっとして動かないものですが、そこに描かれる場面はどこまでも長く大きく引き伸ばされていると同時に、どこまでも細かく細分化されています。

廃名は、現実と物理時間とを、創作に対する束縛としては、まったく無化したのであります。廃名にとっての時間とは、根元から一つ混沌の状態なのであります。なので、それは叙述に対して全然障害ではないものであります。過去、現在及び将来は、まったく限界を持ちません。それらはすべて歴史の中の一つ一つ「瞬間」に属するもので、同じ地位を持っています。しかし歴史は、初めがあって、終わりがありません。廃名は、時間と歴史に対して特別な理解を持つことこそ、何の束縛も無く自由にその間を行き交うことが出来ると思います。

廃名の文体の特徴は、「詩的」であることと「晦渋」であることにあります。

詩的であるというのは、たくさんの論者たちが廃名の文体の特徴として共通に認識するところでもあります。廃名の小説における文体は、詩的な人生であり、人生の詩化であります。廃名の文章に書かれている世界は、著者が見聞きした実際の人世ではなく、創造した空想の写像であります。その世界は、彼の心を通して「蒸留」・浄化・美化された世界であります。そういう空想の世界と対応するために、廃名は小説に詩的な形式を与えたのだと想われます。

また廃名の小説は、従来より晦渋、難解という特徴によってよく知られています。

彼の詩である周作人は、こう述べています。「晦渋である原因は主に二つある。それは思想が奥深いことと思想の混乱とである」。

廃名の小説がなぜそのように晦渋になったかという、それは廃名が小説の中に「個人化」という特徴を持つ「意志と心象」を処理しようとしたことと直接名関係があるからだと想われます。

北京大学の研究者・銭理群は、廢名は中国「五・四」時代以後、西洋の思潮によって呼び覚まされた中国現代知識人から「ドン・キホーテの雰囲気」を発見した人だと述べています。廢名が中国現代知識人のドン・キホーテの雰囲気を見つけたとされるのは、自我に対する発見、或いは自我の覚醒ということでもあります。セルバンテスの『ドン・キホーテ』から深い影響を受けた『莫須有先生伝』は、まさに「中国現代のドン・キホーテ」の懐いている主題を体現したものであります。

ある人は、廢名の『莫須有先生伝』という小説は、失敗した作品だというだけでなく小説とさえも言えないものであると述べています。廢名は、探索されることを持つ小説家であります。